ZENFUREN

子どもたちと
この国の
未来のために

全附連｜全国国立大学附属学校連盟・一般社団法人全国国立大学附属学校ＰＴＡ連合会

PTA団体表彰受賞者のみなさん

全附P連 令和7年度総会開催

6月7日（土）お茶の水女子大学

全附P連 新会長に宮本昌尚（香川大学教育学部附属坂出幼小中）が選任

第七三回一般社団法人全国国立大学附属学校ＰＴＡ連合会（全附Ｐ連）総会が、六月七日(土)にお茶の水女子大学で開催されました。

総会は二部構成で行われ、一部は、令和六年度桑名会長から始まり、令和六年度の組織構成、附属学校に通う子どもたちの異動状況について報告がされました。その後は、令和六年度事業報告、収支決算報告、令和七年度役員の承認について審議され、全て賛成多数にて可決されました。

その後の休憩中には、令和七年度新理事や監事による第一回理事会が開催され、令和七年度会長に香川大学教育学部附属坂出幼小中の宮本昌尚氏が選任されました。その後、総会再開後、理事会にて宮本会長の選任された報告がされ、令和七年度の事業計画案および収支予算案が審議され、全て賛成多数により可決されました。

二部は、来賓、宮本新会長の挨拶に続き、文部科学省総合教育政策局教育人材政策課教育養成企画室長　若林徹氏が行政説明をなされました。その後、ＰＴＡ団体表彰の結果が発表されました。会長賞を受賞した福岡教育大学附属幼稚園や優秀賞を受賞した附属十三校園ＰＴＡに表彰状が授与され、また個人表彰では、ＰＴＡ活動を通じて附属学校の発展に貢献された方々へ感謝状が授与されました。その後、財務省、金融経済教育推進機構からのご来賓の方々から行政説明がなされました。

この令和七年度総会をもって、新たな全附Ｐ連が発進され、これまで以上に全国の附属学校やＰＴＡ活動が発展していくよう、情報共有を強化し支援を行っていく決意を参加者が共有する機会となりました。

国立附属学校の魅力や成果を発信していきます

文部科学省総合教育政策局教育人材政策課教員養成企画室長
若林　徹氏

令和7年4月1日付けで教員養成企画室長を拝命した若林と申します。

私は、学生時代に国立附属小学校と中学校で教育実習をさせていただき、児童生徒や教員の能力や意識の高さに驚いたことがありました。ただ、その衝撃や経験は、後に行った公立学校の教育実習ではあまり役に立てることができず、附属学校は特殊な世界だったのだとも感じました。

国立附属学校のミッションは、その学校の子どもたちをしっかりと育てることだけでなく、教職を志す学生を育てること、現職の教師の研鑽の場となること、地域の公立学校のモデルとなること、日本中の教育を変えるような先導的な実践を行うこと、大学の教育研究へ協力すること…など大変多岐にわたります。

これらを実現するためには、学校の先生方の努力、大学や文部科学省の支援だけでなく、保護者や関係者の方々の理解や協力が不可欠であり、関係者が意識と力を合わせる必要があります。

私自身、今後、出来るだけ多くの附属学校をこの目で見て学び、附属学校が「特殊な世界」ではなく、日本の教育を下支えしリードする存在であることが広く認知されるよう、その魅力や成果を発信していきますので、よろしくお願いします。

LINE UP

—1面—
総会特集
—2～3面—
令和7年度 新体制 活動方針
—4面—
寄稿 総務省 meta日本法人
—5面—
全附連盟特集
—6面—
全附Ｐ連特集
—7面—
全附P連 作文･絵作文コンクール
—8面—
全附Ｐ連団体表彰
—9面—
幼稚園特別支援特集
—10面—
全国大会告知 全国同窓会
—11面—
教育後援会
—12面—
ＯＢ訪問

ご挨拶 ～附属学校のPTAとしての役割とは～

一般社団法人全国国立大学附属学校
ＰＴＡ連合会
会長 **宮本 昌尚**
（香川大学教育学部附属坂出幼小中学校）

令和7年度一般社団法人全国国立大学附属学校ＰＴＡ連合会会長に就任いたしました宮本昌尚です。所属は香川大学教育学部附属坂出幼小中学校です。1年間よろしくお願いいたします。

全附Ｐ連ではここ数年「子どもたちとこの国の未来のために」という基本理念のもと、様々な活動をしてまいりました。しかし子どもたちを取り巻く環境は厳しさが増しているように感じております。

一つ目に学校内外での安全、安心の確保についてであります。子どもたちが心身ともに健全に成長していくために、各学校をサポートしていきたいと思います。二つ目にＰＴＡの存在意義について、全国的にもＰＴＡ不要論が多く聞かれるようになっております。しかし国立大学附属学校のＰＴＡ団体は、その学校が持つ特別な目的達成のためにある組織であると考えております。それぞれの学校の目的をしっかりと把握し、大学と力を合わせて子どもたちと子どもたちの通う附属学校を守っていける団体になっていければと思います。三つ目に国立大学附属学校の存続問題についてです。少子化の影響や国の予算や運営の問題等により存続が危ぶまれている学校もあります。地域に必要不可欠な学校として、そしてこの国の未来を託せる学校として真剣に考えていく必要があると考えております。

現在第四期中期目標・中期計画の成果を形にしていくべき時期になっており、その中でも教職員の方々は子どもたちの成長に真摯に取り組んでおられます。我々はその環境をしっかりと守っていき、全国の国立大学附属学校がこの国の教育のモデルとして必要とされる存在であり続けられることを支えていける団体でありたいと思います。

全ての子どもたちの豊かな未来のために

全国国立大学附属学校連盟
理事長 **関口　睦**
（埼玉大学教育学部附属中学校長）

社会の変化は複雑で予測困難となり、どのような職業や人生を選択するかにかかわらず、全ての子どもたちの生き方に影響を与える時代が来ています。このような時代だからこそ、変化を前向きに受け止め、自分の頭で考え、社会や自分の人生、生活を人間ならではの感性を働かせて豊かなものに変えていくことが求められています。このような中、学校の役割は子どもたちが自分の持ち味や可能性を理解し、他者を尊重し、多様な人々と協働しながら主体的に課題解決をし、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることを目指すことにあると考えます。全国の国立大学附属学校園においてもゴールを共有し、各校園の課題に真摯に取り組み、相互協力を通して、豊かで明るい未来を切り拓く子どもたちの人間力の育成に尽力してまいります。引き続きお力添えくださいますようお願いいたします。

令和７年度　活動基本方針

一般社団法人全国国立大学附属学校ＰＴＡ連合会

一般社団法人全国国立大学附属学校ＰＴＡ連合会（以下、全附Ｐ連）は、全国56の国立大学法人に設置された幼稚園48園・幼保連携型認定こども園１園・小学校67校・中学校68校・高等学校15校・義務教育学校４校・中等教育学校５校・特別支援学校45校、計２５３校園（令和７年３月現在）の置かれている現状と求められる使命を十分に理解した上で、その絆とスケールメリットを生かし、子どもたちの学習環境の充実と安心安全の確保、さらには附属学校の発展、国立学校としてこの国の未来を見据えた日本の公教育の振興に寄与することを目的とし、ＰＴＡ活動の実践と研鑽を推進する。

また、全国国立大学附属学校連盟（以下、連盟）とともに、日本教育大学協会をはじめとする諸団体と連携しながら附属学校および附属学校を設置する国立大学法人をサポートし、附属学校の持つ独自性や創造性、社会的使命、存在意義、現状などをそれぞれの地域社会および全国的に発信することにより広く世の中の理解と支援が得られるよう積極的な活動を展開する。

１　共有、対話による理解

附属学校の果たすべき使命である日本の公教育を支える国の拠点校、地域のモデル校としての役割について、学校をサポートすべくＰＴＡが参画し研究実践することで得た情報を会員相互で共有するとともに、連合会はその貢献度を各関係官庁や諸団体に広く発信していく。また、各学校ＰＴＡがそれぞれの学校で直面する課題を解決するための一助として、設置者である国立大学法人とのさらなる連携と対話を提唱する。

２　附属学校ＰＴＡ活動の活性化支援と各組織の相互連携

子どもの成長過程に応じた教育の在り方、学習環境の充実と安心安全の確保、附属学校を取り巻く諸問題などへのＰＴＡの関わり方を実践研究し、その成果や課題を共有、議論するための研修大会を開催し、全附Ｐ連、連盟と各学校ＰＴＡとの絆をより強く保つ。研修大会は各学校ＰＴＡの会員も視聴できるような開催方法とし、全国８万世帯の家庭に広く情報の共有ができることで会員の利益を確保する。また、全国９地区主催の実践活動協議会など各地区会活動を有機的に支援し、連盟との協働による活動の活性化を図る。加えて全国国立大学附属学校教育後援会連絡協議会と情報を共有し連携する。

３　対内および対外への広報活動の強化

各学校ＰＴＡが子どもたちとそれぞれの学校にしっかりと寄り添い、有意義な活動ができるよう、参考となるＰＴＡ活動の事例および情勢などを全国の附属学校および各学校ＰＴＡに発信し情報共有の強化を図る。また、附属学校がさらに広く世の中の理解と支援が得られるよう、マスメディアや関係諸機関に対し積極的な広報活動を展開する。さらにはＩＣＴを活用したタイムリーな情報交換、共有など、連合会が主体となってその運営強化を図る。

４「共に生きる」ことの推進

連合会では特別支援教育に対する理解と連携を進める諸活動の推進を掲げ、様々な取り組みを継続してきた。これからも校種を超えた絆を育て、多様な個性を持つ仲間との相互理解を育む活動を推進および発信する。また、自他を共に尊重する態度、能力の育成、自己有用感・自己肯定感の育成を目指した活動を推進し、インクルーシブ社会および一億総活躍社会の実現の牽引に努める。また、全人類的な課題であるＳＤＧｓに則った教育にも貢献する。

５　国の目指す教育改革の先駆者として

国の目指す教育改革の先駆者たる附属学校のＰＴＡとして、全附Ｐ連は学校の働き方改革に協力するとともに教員という職業の魅力度向上に貢献する。加えて外部人材や資源を発掘し子どもたちの新しい学びの環境を創造することを提唱する。また、子どもの将来が生まれ育った環境によって左右されることのないようその現状を調査研究および実践し、有効な対策と教育を通じて貧困が連鎖することなく、すべての子どもたちが夢と希望を持って成長することのできる社会の実現を目指した活動を推進する。さらには学校の内外を問わず子どもたちの安心安全を確保するため防犯、防災に関する教育や活動および有害なＩＴ環境の問題から子どもたちを守る活動を推進する。

６　重ね合いを続けて

現在のＰＴＡに求められていることは何かを考えるにあたり、今までの歩みを止めることなくさらに先を見据えた活動を続けていく。

基本となる教育基本法の理念・目的・機会均等を学校とともに実現していくために、さらに国立大学附属学校の目的達成のために我々のなすべきことをし、また今の時代に即したＰＴＡの活動を模索し発信していく。

地区会や単位ＰＴＡへの働きかけを通して第４期中期目標・中期計画の実現に向けた取り組みを大学や附属学校と力を合わせて具現化していくことを念頭に、国立大学附属学校の存在意義を発信し続けていく。

令和７年度　委員会活動

総　務　委　員　会

１．総務全般
２．諸会議の設営
（総会・正副会長会・理事会・評議員会・地区会長会、運営企画会議）
３．地区間交流事業の実施
４．附属学校での取り組みを発信する場の提供
５．表彰の企画・運営
６．文部科学省をはじめとする関係省庁、関係団体との連携
７．その他

広　報　委　員　会

１．広報活動全般（情報収集・情報発信・取材対応）
２．附属だよりの企画・取材・編集・発行
３．ホームページの企画・運営
４．絵画コンクールの実施
（主管校：北海道教育大学附属函館小学校・附属特別支援学校）
５．作文・絵作文コンクールの実施
６．その他

幼稚園特別支援委員会

１．カンガルーシップ活動助成事業の企画・実施
２．特別支援学校・学級に関する調査研究
３．就労支援に関する調査研究
４．あいサポート運動関係業務
５．附属幼稚園の取り組みに関する調査研究
６．関係団体・特別会員特別支援学校との連携
７．その他

財　務　委　員　会

１．会計業務全般
２．カンガルー保険関係業務
３．ＧＩＧＡスクール・働き方改革に関する調査
４．財政教育プログラム関係業務（財務省との連携）
５．金融経済教育プログラム関係業務（金融庁・Ｊ－ＦＬＥＣとの連携）
６．その他

研　修　委　員　会

１．ＰＴＡ研修会第１６回全国大会の企画・運営
２．全国大会実行委員会の運営
３．ＰＴＡ研修会第１７回全国大会の企画
４．国立大学附属学校全国同窓会との連携、全国同窓会運営協力
５．その他

各　委　員　会　共　通

１．運営企画会議への参画
２．ＰＴＡ研修会第１６回全国大会への参画
３．広報活動（ホームページ運営含む）への協力

＜ 特別委員会・実行委員会 ＞

研修会実行委員会

１．ＰＴＡ研修会第１６回全国大会の連絡・調整・実施
２．ＰＴＡ研修会第１７回全国大会の企画・連絡・調整
３．その他

特　別　委　員　会

１．いじめ防止対策活動事業
２．特別広報活動（附属学校に関する戦略的広報活動、ＳＮＳ等）の企画・運営
３．７５周年に向けた事業の見直し
４．その他

令和７年度　全附Ｐ連 活動方針

直前会長｜副会長｜委員長｜監事｜地区会長

桑名　良尚　直前会長

職務経験を活かし、地区会・連盟・省庁関係・他団体とのパイプ役として、全附P連の更なる発展のため、全力でサポートしていきます。

世古　丈人　副会長　全国大会実行委員長（研修委員会　主担当）

大学･学校･保護者が一体となり､子どもたちの「生きる力」を育む社会を構築できるよう、全国大会等魅力ある研修会を企画･立案･運営していきます。

田城　敏史　副会長　総務・財務委員会 主担当

総務および財務担当副会長として、会務運営の円滑化と組織の信頼性向上に努め、適正予算の編成･執行を通じて健全な財政基盤の確立を図り、関係機関と連携を深めながら持続可能な会の発展に貢献してまいります。

羌　叡應　副会長兼専務理事　広報・幼稚園 特別支援 担当

附属学校の魅力や意義を客観的エビデンスをもって社会に向け発信し、附属学校の公益性･公共性を高める活動に取り組んでまいります。

中尾　かんな　総務委員長

組織全体の動きを把握しつつ、各地域との連携を強化し、理事会や各事業が円滑かつ効率的に運営できるように努めてまいります。

中井　優　財務委員長

職業会計人としての知見を活かし、適正な予算執行と財務管理について取り組んでまいります。カンガルー保険の推進を図ります。

村上　哲平　広報委員長

全国附属学校の取り組みやPTA活動の魅力をより広く周知し、子どもたちの笑顔あふれる情報を発信するよう努めてまいります。

小川　浩司　研修委員長

研修委員会では、ここにしかない学びと交流を届けることを目指し、心に残る有意義な研修となるよう企画運営に努めます。

小池　秀樹　特別委員長 幼稚園特別支援委員長

多様性の理解と共生社会を育む教育活動を推進し、各幼稚園・特別支援学校の魅力ある活動の支援と情報発信に努めてまいります。

萩原　清明　監事

本会の活動方針を踏まえ、健全かつ適正な運営が実施されていることを確認し、監査業務をおこないます。

髙地　たか子　監事

全附P連の活動が、時代に即し公共性の高い運営をしているか、監事として公正な監査を実施したい、と思い新たにしております。

彦坂　秀樹　事務局長

附属学校園が国の拠点校、地域のモデル校としての役割を果たすべく、事務局として全附Ｐ連と全附連盟の活動を支えてまいります。

中瀬　正貴　北海道地区会長

北海道地区の各学校園や後援会としっかり連携し、子供たちの為に学校と家庭を繋ぐ架け橋でありたい。

木幡　英雄　東北地区会長

地区間の交流を図り、各学校園の取り組みが(P)ぱぁっと(T)楽しく(A)明るい活動に寄与できるよう努めます。

佐藤　平八郎　関東地区会長

教育環境のみならず様々な変革を求められる時代だからこそ、子供たちの為に夢を語り合える附属学校園となりましょう。

安藤 実理　北信越地区会長

家庭・地域・大学との連携の視点から、PTAのあり方や役割について各学校園の課題を共有し、解決に取り組みます。

三枝　祐一　東海地区会長

東海地区のみならず他の地区とも情報を共有し、子どもたちが安全・安心に、笑顔で生活できる教育環境作りに取り組んでまいります。

羌　叡應　近畿地区会長

近畿地区37校園の連携強化を図り、地区間交流を促進し、全附P連との情報共有に努め、組織改革と課題解決に取り組んでまいります。

山中　達郎　中国地区会長

国立大学附属学校園の伝統を守りながら子どもたちの未来のために活動していきたいと思います。中附連・中附Ｐ連鳥取大会への皆さまのご参加をお待ちしております。

春田　朋子　四国地区会長

子供たちが笑顔で過ごしやすい学校生活を送るために、他附属学校園との情報交換を深め連携し､時代に即したPTA活動を取り組んでいきます。

兒玉　剛　九州地区会長

多様な価値観を尊重しつつ、子どもを真ん中にして集うチーム附属として力をあわせ、共に学び支え育っていけるよう活動を行います！

令和７年度　全附Ｐ連 組織図

役員｜理事｜監事｜顧問｜評議員

理事会推薦理事　　地区推薦理事

直前会長	桑名　良尚	令和５・６年度会長
会　長	宮本　昌尚	（香川坂出幼小中）

監　事	髙地　たか子	令和５年度 副会長
	萩原　清明	令和４年度 副会長

専務理事	羌　叡應	（神戸小）

事務局	
事務局長	彦坂　秀樹
主事	美野　未来

担当副会長（主）	田城　敏史（島根義務教育後期）	田城　敏史（島根義務教育後期）	羌　叡應（神戸小）	世古　丈人（三重中）	羌　叡應（神戸小）
担当副会長（副）	羌　叡應（兼）	羌　叡應（兼）	世古　丈人（兼）	羌　叡應（兼）	世古　丈人（兼）
委員会	総務	財務	広報	研修	幼稚園特別支援
委員長	中尾　かんな（島根義務教育前期）	中井　優（奈良女中等教育）	村上　哲平（静岡浜松小）	小川　浩司（鳴門教育幼）	小池　秀樹（上越中）
副委員長	竹下　英明（横浜国立横浜小）		長谷川　康介（北海道教育函館小）	間宮　達紀（千葉小）	原野　美沙（愛媛特支）
	田邉　有彦（高知小）		内田　麗奈（京都教育桃山小）	森口　智志（東京中等教育）	山口　美穂（秋田特支）
	岡　孝郎（岡山中）			金丸　剛史（宮崎中）	

実行委員会・特別委員会	
全国大会実行委員会	特別委員会
実行委員長	委員長
世古　丈人（兼）	田城　敏史（兼）
副実行委員長	副委員長
小川　浩司（兼）	中尾、中井、村上、小池（兼）
サポート担当 研修委員会	サポート担当 全委員会
全理事 全国大会準備員	全理事 専門委員 岡部太郎、安村俊己、呉本啓郎、神余智夫、板倉雄一郎、増田梓、齋藤伸、森川誠

連盟選出理事	塚本　博則（東京学芸小金井小）	関　健太（北海道教育旭川中）	岩﨑　弘（大阪教育特支）

顧　問	大竹　昌士（令和３・４年度会長）	田口　智之（令和４年度 副会長）	西村　寧（令和６年度 委員長）	真壁　雄一（令和６年度委員長）	竹川　裕之（全附後連理事長）

評議員	**北海道地区**（会長　中瀬　正貴）		**東北地区**（会長　木幡　英雄）		**関東地区**（会長　佐藤　平八郎）	
	中瀬　正貴（北海道教育札幌中）	田村　総司郎（北海道教育旭川中）	木幡　英雄（岩手中）	佐藤　充孝（福島小）	佐藤　平八郎（茨城小）	大倉　徹（東京中等教育）
	北信越地区（会長　安藤　実理）		**東海地区**（会長　三枝　祐一）		**近畿地区**（会長　羌　叡應）	
	安藤　実理（信州松本中）	佐藤　豊（新潟長岡小）	三枝　祐一（愛知教育名古屋小）	柳場　雄貴（岐阜小中）	松村　望（滋賀小）	児島　幸治（神戸中等）
	中国地区（会長　山中　達郎）		**四国地区**（会長　春田　朋子）		**九州地区**（会長　兒玉　剛）	
	山中　達郎（鳥取中）	吉永　周平（広島三原学校園）	春田　朋子（高知特支）	坂本　智紀（愛媛小）	兒玉　剛（宮崎中）	友利　圭（琉球小）

連盟選出評議員	太田　千佳子（元北海道教育特支）	鎌田　正裕（元東京学芸竹早幼小）	吉田　隆（元奈良女中等教育）	南　伸昌（元宇都宮幼）	木山　慶子（元群馬特支）

省庁等の取組み

ICTリテラシー向上に向けた官民連携プロジェクト「DIGITAL POSITIVE ACTION」の推進について

総務省 情報流通行政局 情報流通振興課 情報活用支援室
室長 西 久美子 氏

一般社団法人全国国立大学附属学校PTA連合会におかれましては、PTA活動を通じ、子どもたちの健全育成のために多大なる御尽力を頂いておりますこと、心より御礼申し上げます。

今般、SNS等の爆発的な普及による利用形態の多様化、AI等の技術革新により、デジタル活用にかかるルールやマナーの理解が追い付いていない状況が生じているとともに、様々な形態の偽情報・誤情報の流通・拡散も社会問題化しております。また、インターネット利用の低年齢化も年々進んでおり、情報通信を安心・安全に利用するためのICTリテラシーの一層の向上が求められています。

総務省では、本年１月に、官民連携のICTリテラシー向上にかかる意識啓発プロジェクト「DIGITAL POSITIVE ACTION」を発足しました。プラットフォーム事業者、通信事業者、IT関連企業、関連団体と連携の下、「つくろう！守ろう！安心できる情報社会」というスローガンをもとに、利用者のICTリテラシー向上を目的として、官民の取組を集約した総合ウェブサイトの充実、リテラシーに関する調査・分析、多様な企業・団体によるセミナー・シンポジウムの開催、普及啓発のための教材の作成、参画事業者によるサービス設計上の工夫等自主的な取組の促進などの取組を行っております。

つくろう！守ろう！安心できる情報社会

DIGITAL POSITIVE ACTION

その一環として、総務省では、デジタル空間での特性を理解し、新たな課題にも対処できるICTリテラシーについて、最新の事例も用いながら世代別（青少年向け、保護者向け、シニア向け）啓発教材「5つの分野のICTリテラシーを学ぼう～つくろう！守ろう！安心できる情報社会～」を公表しております。また、「インターネットとの向き合い方～ニセ・誤情報にだまされないために～」では、災害時に広まる偽・誤情報など最新事例や生成AIの影響、民主主義への影響等を踏まえて、偽・誤情報について学ぶことができます。

さらに、総合ウェブサイトにて官民のリテラシー教材・コンテンツを年齢層及びレベル別にマップ化した「教材マップ～まなびパレット～」を掲載し、利用者それぞれに合う教材・コンテンツを一目で分かるようにする工夫をしております。多様な教材がありますので、保護者の方々におかれまして是非ご活用いただければ幸いです。

青少年の安全なSNS利用のためにティーンアカウントや啓発活動など、Metaの取り組みのご紹介

Meta日本法人
Facebook
公共政策本部
ポリシープログラム
マネージャー
栗原 さあや 氏

現代において、他者や社会とつながる手段としてSNSは欠かせないツールです。デジタルネイティブである子どもたちには特に重要だと言えるでしょう。一方で、不適切なコンテンツとの接触、過度な利用による影響などの懸念を抱く保護者や教育者の方々がいることも認識しています。Facebook、Instagramなどのプラットフォームを提供する企業として、Metaでは青少年が安全にSNSを活用できるよう様々な角度から取り組んでいます。

根幹となるのは、プラットフォーム上で認められる行為と認められない行為を定めたポリシーの策定と施行です。人工知能を活用した独自の技術と、日本語を含む様々な言語に対応するチームによる審査を組み合わせ、ポリシーに違反するコンテンツの迅速な検出に努めています。安全対策に携わる人材は世界中で4万人以上、平成28年以降、安全とセキュリティへの投資額は２００億ドルに上ります。

10代の安全な利用に関わる取り組みの代表例はInstagramの「ティーンアカウント」です。日本では令和7年1月に導入を開始。対象は13歳～17歳の利用者で、安全のための様々な設定が自動的に適用されるのが特長です。例えば、見知らぬ人からの不適切な接触を減らすため、フォローしていない人からのメッセージは受信できなくなります。対象年齢であれば例外なくティーンアカウントに移行するため、SNSに詳しくない、あるいは子どもの利用を見守る時間を十分に取れない保護者の負担を大幅に軽減できると考えています。

同機能の認知向上にも力を入れており、令和7年4月には10代の子どもを持つ複数のクリエイターと連携、Instagram上で当事者の目線からメッセージを発信いただきました。これらの投稿は２５０万人以上にリーチしています。青少年支援に関わるNPO法人や保護者など60名以上がイベントに参加したほか、全附P連にご協力いただき、ティーンアカウントやSNS利用に関する話し合いのコツをまとめたチラシを全国の附属中学校に配布することで、保護者と子どもの対話促進を図りました。

デジタルリテラシー教育の観点では、中高生を対象とした出張授業「みんなのデジタル教室」も展開しています。ある授業では地域で災害が起きたというシナリオで少人数のグループワークを実施。近隣の人々が必要とする情報をSNSで発信し、社会にポジティブな影響をもたらす方法を考えます。本プログラムは令和2年の開始以降、延べ4万人以上の中高生が受講しており、成果に手応えを感じています。

冒頭にも述べたように、現代社会においてデジタル技術やSNSを避けて生活することは不可能です。テクノロジーがもたらす利点によって人生を豊かにし、リスクを避けて安全に活用するためには、子どもだからと一概に利用を制限するのではなく、自主性を尊重しながら、大人たちの見守りのもと向き合い方を学び、大人も共に考えることが重要ではないでしょうか。ティーンアカウントやデジタルリテラシー教育プログラムにも、弊社のそのような考え方が反映されています。

Metaは今後も、ポリシーや安全対策の見直し、機能や啓発活動の拡充などを進めていきます。青少年の安全なSNS利用のためには、事業者、保護者、教育機関、関係省庁など、多様なステークホルダーが知見を持ち寄り、協力することが不可欠です。引き続き保護者の方々と子どもたちの声に耳を傾け、教育機関や関係省庁、NPO団体等との連携を深め、青少年の安全なネット利活用に向けた環境づくりに取り組んでまいります。

全附連盟特集ページ　「附属学校園の在り方を考える」

中

埼玉大学教育学部附属中学校

～子どもと教員の Well-being のために

部活動の価値を未来につなぐ挑戦

部活動改革は、働き方改革という文脈で考え進めていくと、子ども不在の改革になりがちです。これまでの本校の取組を振り返ってみると子どもの視点に立った改革を進めていくことがいかに大切であるかがわかりました。本校では、次の3つの視点を大切にしながら改革を進めてきました。

① 技術面での指導を専門家に手放すことにより、生徒の技能向上を図るとともに、活動に対する向き合い方を変え、生徒主体の学びの場として部活動を位置づける。
② 生徒のやりたいことを尊重し活動の自由度を上げるため、サークル活動を立ち上げることを可能にする。学校をやるべきこと、してはいけないことばかりを教える場から、やりたいことが少しでも実現できる場（生徒エージェンシーを発揮できる場）に変える。
③ 民間企業と連携し教員以外の様々な大人が地域の子どもたちと関わる豊かな学びの場を提供し、埼玉大学教育学部附属中学校を地域スポーツの拠点として価値づける。

部活動改革に向けたアクション

令和４年度
・部活動改革ワーキンググループを設置し部活動廃止やクラブへの移行について検討をし、職員会議において令和６年６月の大会終了後にクラブ・サークル化への移行を決定しました。さらに、２月には今後の部活動の在り方についての文書を生徒・保護者に配布しました。

令和５年度
・部活動改革ＷＧにおいて本校の教育方針を民間会社に理解していただきながら、今後の部活動の在り方について時間をかけて協議を重ね、目指す姿の共有を図りました。また、入学希望者対象の学校説明会では、土日の運動部と吹奏楽部の活動が民間委託となり、他の文化部はサークルに移行することなどを説明しました。

令和６年度
・３年生の大会までは試行期間とし、顧問教員と外部指導者が連携して土日の部活動の指導にあたり、緩やかな移行に努めましたが、生徒総会での部活動のクラブ・サークル化の案は、生徒の不安が解消されず、クラブ・サークル化の提案が否決されました。生徒への聞き取りでは「賛成すると部活ができなくなる」「急な話で賛成できなかった」といった話があったため、パブリックコメントを通して丁寧に説明をしていき、７月の臨時生徒総会で可決されました。

運動部と吹奏楽部のクラブ化

休日：外部指導者による指導

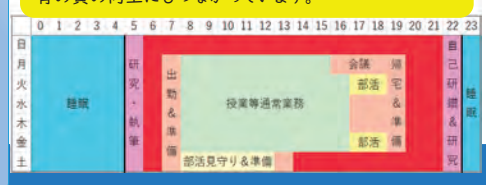
平日：生徒主体の運営（週２日程度）

休日に専門家から受けた技術指導をもとに、平日には休日で学んだ技術や練習方法を生徒自らの運営により試していき、再び休日にフィードバックを受けるという学びの場に活動の位置付けを変更しました。教員の役割は生徒による運営の見守り・指導とし、基本的に技術面の指導はしていません。また、長期休業中には、希望者対象に専門家による走力向上や栄養バランスに関する講習会などの特別企画を実施。学校施設が空いている時間帯には、小学生以下のスポーツ教室を定期的に開設し、附属中の地域スポーツの拠点化に向けた取組を進めています。

文化部のサークル化

吹奏楽部以外の文化部のサークル化を進めました。生徒がメンバーを集め、顧問の先生を探し、活動方針と計画を書面により届け出ることによって誰でも自由にサークルを立ち上げることができる仕組みを作りました。現在、8つのサークルが立ち上がっています。

教員は家族との時間（赤の時間帯）が十分取れ、研究時間も無理なく確保できようになりました。部活動改革は教育の質の向上にもつながっています。



中

生成 AI 活用の可能性

～生成 AI を活用した中学校国語・英語の「書く力」の向上をめざす授業実践から～

大阪教育大学附属池田中学校

1. はじめに

学習指導要領は、「情報活用能力」を学習の基盤となる資質・能力と位置づけ、情報技術を学習や日常生活に活用できるようにすることの重要性を強調している。このことを踏まえれば、新たな情報技術である生成 AI が、どのような仕組みで動いているのか、利点や問題点は何なのかという理解、どのように学びに活かしていくかという視点、近い将来使いこなすための力を意識的に育てていく姿勢は大切である。その一方、生成 AI は発展途上にあり、多大な利便性の反面、個人情報の流出、著作権侵害のリスク、偽情報の拡散、批判的思考力や創造性、学習意欲への影響等、様々な懸念も指摘されており、教育現場における活用にあたっては、児童生徒の発達の段階を十分に考慮する必要がある。

本校では、生成 AI のツールとして「スタディポケット」を導入している。スタディポケット for STUDENT は、生徒の個別最適な学びや協働的な学びの一助として、スタディポケット for TEACHER は、教員の業務軽減を目的としている。そして、昨年度から文部科学省より発出された、「生成 AI の利用に関する暫定的なガイドライン」をもとに「書く力」の向上をめざして、国語・英語の授業で生成 AI を活用している。

2. 英語科の授業実践

(1)授業の流れ

事前指導 → 提示されたテーマについて自身の力で書く →生成 AI を用いて書き直す → 違うテーマについて自分の力で書く

(2)成果と課題

成果として、内容・構成・語彙の向上や個別最適な指導、教員負担の軽減が見られた。一方、正確性の改善は限定的であった。フィードバックを有効に取り入れるためにもメタ認知力・批判的思考力・読解力の育成が今後の鍵となる。

3. 国語科の授業実践

(1)授業の流れ

事前指導 → 2つの説明的文章を読み、それぞれの文章構成の工夫についてスピーチの発表原稿を自分の力で作成する → 生成 AI を活用し、作成した発表原稿の推敲を行う → 完成した最終原稿をもとに、スピーチを行う

(2)成果と課題

成果は、「個別最適な学び」の実現が図れた。生成 AI のフィードバックを取捨選択した理由や根拠を毎時間ポートフォリオに記録させることで、生徒はメタ認知力や批判的思考力を働かせながらスピーチ原稿を作成することができた。一方で、AI の情報をファクトチェックする姿勢や、自分の言葉で表現する意識を育てることの重要性も見えてきた。

4. おわりに

生成 AI の活用が手段の目的化とならないよう、「単元のねらい」や「育てたい資質・能力」を明確にした実践が重要である。今後は効果と課題の検証を重ね、個別最適・協働的な学びに生かすとともに、プロセス重視の評価方法や教師と AI の役割分担の整理が求められる。

幼

香川大学教育学部附属幼稚園

「働きやすさ」と「働きがい」が感じられる職場づくりを目指して

（令和6年度）

チームで保育の質の向上を目指すうえで「働きやすさ」と「働きがい」が感じられる職場づくりは重要であると捉え、共に意見を出し合いながら「保育者の負担軽減」と「保育の質」の両側面から業務の改善に取り組んでいます。

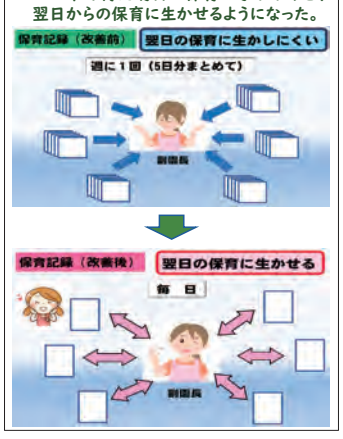
業務改善に向けた見直しの実際
○ 短期指導計画（週案）の見直し
○ 指導計画の修正
○ 子どもと共につくる園生活
○ 日々の振り返り
○ 記録及び情報の発信
○ 自己評価

短期指導計画（週案）の見直し

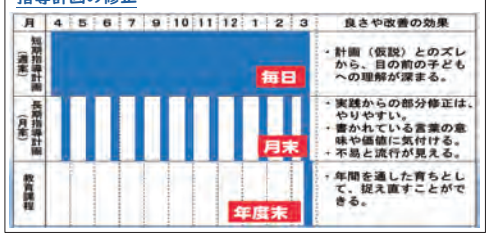
★ 「子どものねらい」だけでなく「保育者のねらい」も書く。
★ 「保育者のねらい」は、保育中に意識しやすいよう、一つまたは二つに絞る。毎週変えなくてもよい（ねらいを継続することにも意味がある）。
→ 負担感が軽減するだけでなく、自ら課題を捉え、よりよい保育者になろうとする向上心が生まれた。
★ 毎週、保育者全員のねらいを一覧にし、意識の共有を図る。
→ 4週分の全員のねらいを一つのシートに集約することで、保育者自身の意識の変容や成長の可視化につながった。

日々の振り返り

1週間分まとめて副園長に提出していた保育記録を、毎日提出する方法に変え、副園長はその日のうちに記録へのコメントを返す。
→ 記録を返す際にも対話が生まれ、語り合いの中で得た明日の保育の手がかりを、翌日からの保育に生かせるようになった。



指導計画の修正



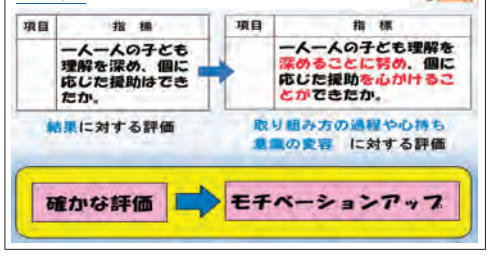
子どもと共につくる園生活

これまで当たり前のように保育後の業務として行っていたことを、園生活の一部として子どもたちと一緒に行う。（例：畑の土や畝作り）
→ 子どものよさに気付く機会となり、その後の園生活の充実につながった。保育後の時間的余裕も生まれた。

記録及び情報の発信

月末に、保育記録の一部をクラスだよりやホームページ用に書き直して保護者へ発信していたのを、毎日のインスタグラムやFacebookでの投稿に変える。※事例研究は継続
→ 保護者にタイムリーに園の様子や考えを理解してもらえる。子どもの育ちを共に喜び合える関係が築きやすくなった。「他のクラスのこともよく分かる」と、子どもたちの育ちについて、保護者の関心も高まっている。投稿への反応が目に見えて分かり、保育者の喜びや働きがいにつながっている。

自己評価

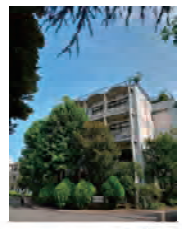


個々の保育者が見付けた、保育の楽しみ方
～自分（たち）らしさを生かした保育の展開～
・“先が見えない展開”こそ楽しい保育
・子どもと共に成長を楽しみながら
・立場を生かした保育ができることが楽しい
・“楽しい”って何!?“自分らしく”っていったい何だ?
・連携の中で子どもを理解し、子どもに合った支援を見付けていく

中

「好きに、挑む」ことができる未来の学校の創造

東京学芸大学附属竹早中学校



1．竹早中学校の概要

【教育理念】「自ら求め、考え、表現し、実践できる生徒」ならびに「他人の立場や意志を尊重できる、視野の広い生徒」の育成を柱とする。前者は「主体性」、後者は「多様性」を育む教育として実践しています。

2．竹早地区幼小中連携教育研究

東京学芸大学主導の産官学連携プロジェクト「未来の学校 みんなで創ろう。プロジェクト」の一環として、未来を切り拓く子どもの主体性が活きる学び」の実現のための実践研究を行っています。本プロジェクトの目的は、学校、企業、教育委員会等が連携し、共通のプロジェクト・ビジョン「好きに、挑む」を実現する未来の学校モデルを開発することです。

3．やりぬく力を育てる「Dプロジェクト」の研究

２０１８年度から取り組んできた「多様性の教育」の研究を深化拡充させるために、生徒自らの発案に基づく活動（通称「Dプロジェクト」）による教育実践を推進すると同時に、その実践においてどのような学びが実現するのか、また活動を推進するにはどのような学校環境が必要なのかを検討しています。

Dream（主に積極性，主体性，興味関心に関わる概念）
Decide（主に主体性，思考・判断・表現に関わる概念）
Develop（発展性，成長，学びに関わる概念）

Dプロジェクト学習においては、「子どもも教師も、誰もがワクワクできる学び」を具体化するような教育実践を、９教科１１領域それぞれの授業実践に加えて実施しており、本校の総合学習や課外活動における教育実践の特徴を際立たせるものです。また、Dプロジェクトにおいては、個人の想いや願いを実現しようとする場を設定し、周囲と協働して活動することを通して自分の思いや願いに挑戦する経験を生徒に与え、主体性の育成と多様性を価値とするような意識の醸成をねらいとしたプロジェクト型活動として取り組んでいます。

この活動を通して様々な知識を獲得するだけでなく、問題発見・提起能力、問題解決能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力等の資質も養われ、単なる調べ学習に終わるものではなく、その成果を広く社会に貢献することもねらいとしており、次年度も新たなプロジェクトを立ち上げ、実践を重ねていきます。

全附Ｐ連特集　「不登校支援について」

不登校の子どもへの支援、保護者への支援、先生への支援

三重大学教育学部
特別支援教育講座　医学分野　教授　松浦　直己

はじめに

不登校の増加が止まりません。図1からも明らかなように、小中問わず急激に増加しており、10年間で3倍以上となっています。特に中学校では約7％の子どもたちが不登校状態です。不登校の定義は、「何らかの理由で30日以上の欠席」であることから、29日までの欠席者はカウントされていません。つまり潜在的不登校児童生徒はさらに多く、今後この動向はしばらく継続すると考えられます。

1．長期化させないこと

近年の不登校の特徴は急速に長期化してしまうことにあると思います。理由は簡単です。インターネット、ユーチューブ、ゲームなど、ネット環境があれば不自由なく1日過ごせてしまうのです。10年ぐらい前だと、新型のゲーム機やゲームソフトを購入する必要がありましたが、現在はＷｉｆｉが完備していれば十分楽しめるでしょう。ネットによりテレビ番組やマンガにもアクセスでき、あっという間に1日が過ぎていったという感覚なのではないでしょうか。

もし3日間そのような生活をして、4日目に「さあ学校に行って勉強しよう」とはならないでしょう。テストが近かったり、友達との関係も良好でなかったりする場合はなおさら体が重いはずです。10日間休んでしまったら余計にハードルは高くなります。3ヶ月も学校にいけず、上記のような生活をしていたら、登校そのものが恐怖になりかねません。

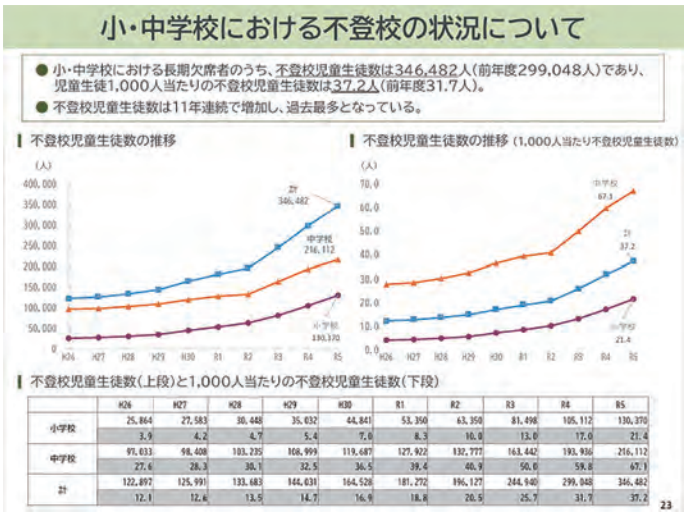


図１　小中学校における不登校の増加現象（10 年間で約３倍）

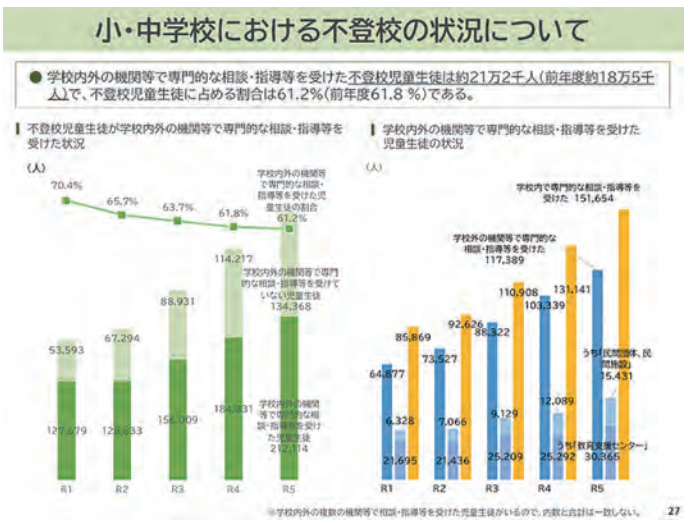


図２　どこにもつながっていないケースが急増

2．どこかにつながること

もう一つの特徴は、どこにもつながっていないケースが急増している点です。図2をご覧ください。薄い緑色は学校内外で専門的な相談・指導を受けていない児童生徒の割合を指しています。つまり学校にも、専門機関にも、民間の支援団体にもどこにもつながっていない子どもたちが増加しているのです。

理由は定かではありませんがいくつか想定されます。1つはあまりにも自宅内での生活で完結してしまっていて、外に出て行くモチベーションが薄れてしまっている可能性があります。学校に行けないことで悩んではいるが、それ以外のことでは特に困ってはいないのかもしれません。もう1つは、あまりにも不登校児童生徒が増加しすぎて、学校側も手をこまねいていることが考えられます。仮に1クラスに3名程度の不登校生徒が存在すると、担任の先生が毎日コンタクトをとるのは事実上不可能でしょう。クラスには、長期欠席者のみならず、長期化しつつあるハイリスクな子どもや、その他生徒指導的な問題行動を呈する子ども、学習や生活面で特別な支援を必要とする子どもなど、多様な背景を有する子どもが存在します。日本の学級担任制度では、ほぼ全ての対応は担任に任されているので、同時多発的に問題が発生すれば、途端に行き詰まってしまうのです。

3．保護者の方に留意していただきたいこと

「粘り強く、子どもとコミュニケーションをとること」

ご子息が不登校状態になれば、誰でも悩み苦しいはずです。きっと焦りや将来に対する不安が強まり、自分の子育てのどこに問題があったのかと自問することでしょう。しかし不登校状態にある子どもが、登校できるようになったら全ての問題が解決するわけではありません。再登校だけを目標設定することは間違っています。

一方で、「行きたくないのなら行かなくてもよい」と判断し、一切の登校刺激を排除することも合理的ではないと思います。重要なのは子どもとコミュニケーションをとることです。少なくとも一緒に食事をとることは心がけていただきたいと思います。不登校児童生徒のほとんどは、「学校に行けたらよいと思っているけどいけない」「このまま学校に行けなかったらどうなるのだろう?」「こんな状態で親に心配をかけて申し訳ない」と苦しんでいます。50年の人生経験のある成人なら、「1，2年学校に行かなくても人生何とかなるだろう」と思えるのですが、10年程度の過去の蓄積しかない子どもは、3ヶ月も学校に行っていない自分に対して、極端に否定的になっています。

ここでこう話しかけてください。「何に困っているの?」「困っていることない?」「助けになるために、どんなことができるの?」そして、こんなことに困っているとか、分からないけど苦しいとか、言葉が発せられたら、「○○に困っているんだね」「分からないけど、苦しいんだね」と繰り返してあげてください。これだけで結構です。無理に解決案を提示すると、次の会話が出てこないこともありますから留意してください。

「朝食と夕食だけは一緒に食べようね」とか「ネットは9時までだよ」とか、一定の約束（親からのお願い）も効果的だと思います。決して押しつけるのではなく、合意形成がポイントです。合意形成するためには、1回の話し合いで決着させようとしないことです。最初から何十回も話し合いを重ねる覚悟で、粘り強くコミュニケーションをとっていってください。

「インターネット環境への依存状態にならないように」

前述のように一部の例外を除き、不登校状態が長期化するとインターネットの依存状態になるのは時間の問題です。昼夜逆転したり、食生活そのものも不安定化したりします。この状態になると再登校どころか、外の世界に出て行くというモチベーションも著しく低下します。

最も危険なのは、ネットを制限しようとすると、保護者に対して攻撃的な行動をとってしまう状態です。親に対して暴言や暴行を呈することで、自分のやりたいような生活を崩させないように抵抗しているとも考えられます。いわば、親と子どもの立場が逆転してしまっているのです。

いわゆる家庭内の暴力が進行すると、保護者も外部に相談できにくくなります。そこに落とし穴があります。すぐに学校に相談してください。また相談可能な外部機関は豊富に存在します。児童相談所、少年鑑別所の地域支援課、市町村の相談窓口、警察（生活安全課の少年係）等です。意外と知られていませんが、このような相談機関は難しい問題の専門家が常駐しています。困ったら相談することです。

親子で立場が逆転しないためにも継続的なコミュニケーションが欠かせません。不登校でお互い苦しかったけれども、親子の絆が強まったというケースは珍しくありません。このようなケースでは人生のどこかの時点で社会適応していることが多いと感じます。不登校状態時に、将来社会参加するためのエネルギーの貯金をしていたようなものでしょう。このようなケースでは、「積極的に貯金しましょう」と背中を押すことができます。やはり親子のコミュニケーションが第1なのです。

4．先生に留意いただきたいこと

文部科学省の問題行動調査では、学校側は不登校の原因について回答を求められています。その結果、「教職員との関係」で不登校になったと回答する割合は約3％です。その傾向は何十年間も変化ありません。しかしながら不登校当事者である子どもに尋ねると、全く異なる結果になります。先生との関係がきっかけで不登校になったと回答する子どもは、約30％にも上るのです。私は不登校問題がなかなか解決しない原因は一部ここにあると考えています。

担任の先生とは上手くいかない、この先生のクラスではとてもやっていけないと感じている不登校児童生徒は約3割存在しますが、その子どもたちは、そのことを担任の先生に相談することは難しいでしょう。保護者の方々も、先生がきっかけで不登校になったとはいいにくいはずです。学校長も担任の先生の対応や態度に問題があると指摘するのは相当勇気がいります。

これらを解決するためには、学校以外に相談できる専門家や機関を整備する必要があります。学校側も「自分達に相談できないことは、積極的に外に相談しましょう」といえるようにならなくてはいけません。先生との不良な関係が不登校のきっかけになっているケースは約3割に上ることを、学校側は謙虚に受け取り、抱えきれない問題を抱えようとしてはいけません。学校はこれまでの万能感を排除し、不登校の長期化を何とかくい止めるような具体的な手立てを仕組んでいく必要があります。

第７回 全附Ｐ連 作文・絵作文コンクール

今回のテーマ
「先生へ、普段伝えられない想い、伝えてみよう！」

審査委員長

審査委員長
くすのき しげのり氏

審査委員長講評

この「作文・絵作文コンクール」のテーマは、「先生へのメッセージ」や「先生との思い出」です。第７回目となる今年度も「作文・絵作文コンクール」には、全国の国立大学の各附属学校から素晴らしい作品の応募がありました。

私は児童文学作家として世界中の子どもたちの心に届ける作品を書いてきました。私の作品には、魔法使いが出てきたり突然不思議な力がついたりということはあまりありません。子どもたちの心の中にあるたいせつな思いをテーマにしたものばかりであり、こうした物語の背景は家庭や学校です。とりわけ学校が舞台の作品が多いのは、子どもたちにとって、たくさんの人と関わり、いろいろなことを学ぶ機会に溢れているからです。

これまでの応募作品同様、今回の応募作品にも、そんな学校の様子や先生との学校生活がいきいきと表現されていました。さらには、先生に対する信頼や尊敬や感謝の気持ちも読み取ることができ、審査をしながら心動かされる作品がたくさんありました。それは、応募者一人一人に、そうした素晴らしい先生との心に残る出会いや学校生活があったということに他なりません。あたりまえだと思われがちな毎日の学校生活のいろいろな場面には、多くの先生方の温かいまなざしがあるのです。

子どもたちの環境を作るのは、私たち大人です。そして、子どもたちが育ちゆく環境を考えるとき、何よりたいせつなのは、人的環境として子どもたちにかかわる私たち大人の姿でしょう。そうであるならば、子どもたちの素敵な作品は、きっと、子どもたちの環境を作り、なおかつ子どもたちにとっての環境である先生方にとっても、大いに励みとなるに違いありません。

子どもたちの毎日に、そして先生方の人生に、たくさんの笑顔があることを心より願っています。

略　歴

1961年生まれ、徳島県鳴門市在住。鳴門教育大学大学院修了。小学校教諭、鳴門市立図書館副館長を経てオフィスKUSUNOKIを設立。現在は作家として児童文学を中心とする創作活動と講演活動を続けている。絵本『おこだでませんように』(小学館)が2009年度全国青少年読書感想文コンクール課題図書に、2011年には、IBBY（国際児童図書評議会)障害児図書資料センターが発行する推薦本リスト「世界のバリアフリー絵本」に選出される。同作品で第2回JBBY賞バリアフリー部門受賞。2013年には『メガネをかけたら』(小学館)が全国青少年読書感想文コンクール課題図書に選定される。『メロディ』(ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス)『ええところ』(Gakken)、『ふくびき』(小学館)『ともだちやもんな、ぼくら』『ええことするのは、ええもんや』(共にえほんの杜)『ダメ！』(佼成出版)『しょうじき50円ぶん』(あかつき教育図書)等、小学校(2024年度改訂)・中学校(2025年度改訂)の教科書において、小学校1年生～中学校3年生の全学年の教科書に作品が採用・掲載される。『あなたの一日が世界を変える』(PHP研究所)『Life』(瑞雲舎)『わたしがはやくねるわけはね……』(小学館)等200作品を超える著作は海外でも広く読まれている。

受賞者一覧

【会 長 賞】

作文

東京学芸大学附属幼稚園　竹早園舎　年長
稲生　幹大

【優 秀 賞】

作文部門

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園　年長
服部　詢也

静岡大学教育学部附属浜松小学校　１年
石田　脩仁

秋田大学教育文化学部附属小学校　４年
津司　昌宗

京都教育大学附属京都小中学校　５年
小嶋　悠生

山梨大学教育学部附属中学校　２年
光本　葉月

京都教育大学附属特別支援学校　高等部２年
宮本　萌那

絵作文部門

鹿児島大学教育学部附属幼稚園　年少
川畑　奏大

長崎大学教育学部附属幼稚園　年中
江﨑　乃咲

上越教育大学附属幼稚園　年長
北角 ひまり

茨城大学教育学部附属小学校　１年
梅原 丞一朗

愛知教育大学附属名古屋小学校　３年
長谷川 夏蓮

福岡教育大学附属福岡小学校　５年
佐藤　湊人

山梨大学教育学部附属中学校　２年
笠原　心愛

大分大学教育学部附属特別支援学校　中学部１年
田邉　愛珠

【特 別 賞】

最優秀学校賞

愛知教育大学附属名古屋小学校

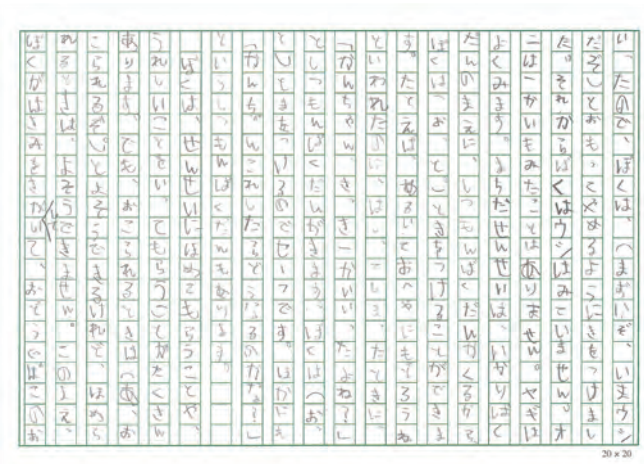
優秀学校賞

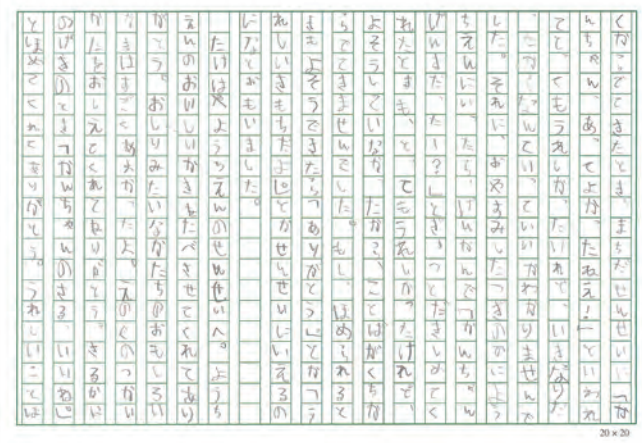
鹿児島大学教育学部附属幼稚園
鹿児島大学教育学部附属中学校

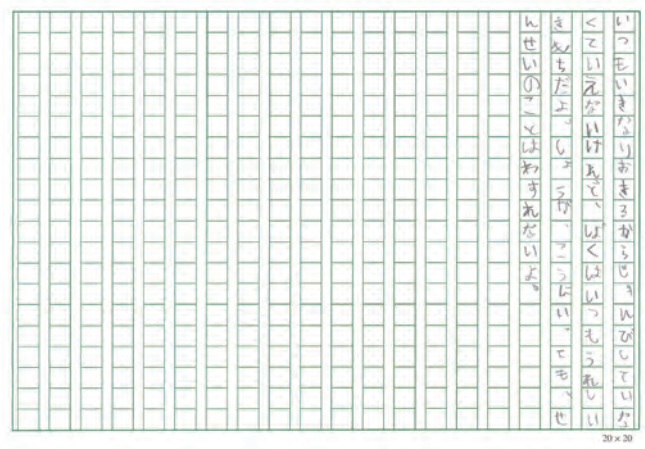
（表示している学年は応募当時のものです）

会長賞　東京学芸大学附属幼稚園 竹早園舎 年長　稲生 幹大さん

（表示している学年は応募当時のものです）







～くすのき先生からのひと言～

だいすきな幼稚園。先生のことも大好きですね。先生の好きなものもよく知っています。
その大好きな先生におこられるときも先生の様子をよく見ていますね。先生の注意には段階があること、いきいきと書かれた文章からは、その段階によって変わっていく先生の表情が浮かんできて、声まで聞こえてきそうです。こうして先生が表情や声で伝えてくれるから、どうすればいいかを考えることができるけれど、ほめられるときは、最初からたくさんほめられるし、それも突然だから、うまく言えないことがあったのですね。そのことをこの作文でちゃんと先生に伝えることができましたね。

作文絵作文コンクール
受賞作品について
詳しくはこちら！

全附P連

表彰

全国の附属学校ＰＴＡはそれぞれの地域で様々な活動をしています。
全附Ｐ連では毎年それらの中から特色のあるもの、特に優秀なものを表彰させていただいております。
ここではそんな活動をご紹介いたします。

会長賞

福岡教育大学附属幼稚園ＰＴＡ

福岡教育大学附属幼稚園PTA「飛行機に乗って世界を旅しよう」

福岡教育大学附属幼稚園ではＰＴＡ活動の一環で、保護者（有志）が保育時間の中で園児と共に楽しむ「城山キッズ」という活動を行っています。今年は「飛行機に乗って世界を旅しよう」をテーマに、園児の〝異文化理解〟を深める活動に取り組みました。今年度は、外国人保護者の方が数人いらっしゃったので、ＰＴＡ活動への理解と参画をしていただきたくこの企画を考えました。全５回実施し、フィリピン、アメリカ、ペルー、ウガンダなど、保護者の所縁ある国に園児が 旅をするという設定で行いました。

園児は、一人ずつオリジナルの〝パスポート〟を持ち、ロープで作った〝飛行機〟に乗って、〝入国審査〟後、ワクワクドキドキの世界旅行に出かけます。飛行機に乗ることも初めての経験という園児も、回を重ねるごとに旅のイメージが湧いてきたようでした。各回の講師は、保護者が担当しました。フィリピンの回では、フィリピン出身の保護者が民族衣装を着て、バンブーダンスを披露しました。アメリカで学生時代を過ごした保護者が担当した回では、クイズ大会を実施し、最後に自由の女神に扮した保護者が現れて、会場が大盛り上がりでした。ペルーで仕事をしていた保護者担当の回では、園児が見たこともない動物や食べ物の写真を紹介しました。アフリカで 長年研究をしている保護者担当の回では、ウガンダから留学生を招き、ウガンダの服装や食べ物、民芸品などを紹介し、現地の幼稚園で踊っているダンスなどを園児と一緒に楽しみ、交流しました。園児は初めて会う外国人ゲストとの緊張を忘れ、笑い声や歓声をあげ、とても楽しそうな様子でした。

各回どのようにすれば園児にその国の雰囲気を味わってもらえるかを何度も話し合い、企画していきました。会場の装飾や流す音楽・担当者の衣装にもこだわり、工夫を凝らしました。ハワイの手作りレイを入国審査後に園児にかけたり、描いたナスカの地上絵などを会場に飾ったりして、その国に行った気分になってもらえるように作成しました。園児は、飛行機の中でのアナウンスの真似をしたり、帰宅後その日に行った国のことを、生き生きとした表情で保護者に話したりして、次の会を楽しみにしていたそうです。

友達のお母さんやお父さんが、自身の海外経験を直接園児に語ることで、自分が住んでいるところとは違う国が身近なものとなり、園児の意識が変化すると考えています。世界には、たくさんの国の文化や言語があることを知り、異文化の人とコミュニケーションをとることは、興味の幅を広げるだけでなく、それらを大切にし、自分が育っている日本という国を更に知ろうというきっかけにも繋がります。「城山キッズ」で留学生との出会いがあったように、旅は色々な人との出会いがあります。出会いは「宝」です。たくさんの人と出会い楽しい経験をして心豊かに育ってほしい、そんな保護者の熱い思いがたくさん詰まった活動でした。

優秀賞

事例名称	ＰＴＡ名称
コラボ製作・世界に一つだけの花～色とりどりのタペストリーパネルでつながろう～	京都教育大学附属幼稚園育友会
保護者と先生、子どもたちとの絆を深めるPTCC全体行事	奈良女子大学附属小学校育友会
「植樹の想い。継承していく緑育」	大阪教育大学附属幼稚園ＰＴＡ
いじめ問題をみんなで考えよう	三重大学教育学部附属学校園育友会
総務・常任委員による『桐の子祭り』	北海道教育大学附属函館小学校父母と先生の会
誰もが楽しく参加できる「伏見桃山を巡る謎解きウォークラリー」	京都教育大学附属学校園育友会連合会
みんな集まれ！わたしたちの創立１５０周年記念事業	宮城教育大学附属小学校ＰＴＡ
彩りＰＴＡ	大分大学教育学部附属幼稚園ＰＴＡ
みんなで守ろう！自分の命	岡山大学教育学部附属特別支援学校ＰＴＡ
「おうちでバザー」	岡山大学教育学部附属小学校ＰＴＡ
大阪マラソン“クリーンUP”作戦で五校園の想いをひとつに	大阪教育大学附属特別支援学校ＰＴＡ
地域について探求的に取り組む授業への参加による地域のつながり活性化への取り組み	島根大学教育学部附属義務教育学校前期課程ＰＴＡ
山形大学附属幼稚園ＰＴＡ　子育てに活かすアンガーマネジメント～感情と上手に付き合うために～	山形大学附属幼稚園ＰＴＡ

入国審査

アメリカ編

ペルー編

ウガンダ編

全附P連 第21回 絵画コンクール

「キラキラ★未来を描いて」

函館は夜景が有名な街です。キラキラ素敵な夜景を楽しみに全国から多くの人が観光に訪れてくれます。また、函館小学校は昨年度創立100周年を迎え、次の100年（未来）に向け気持ちを新たにし、函館中学校は80周年、特別支援学校も50周年を控え、各校が力を合わせさらなる未来へ向かっています。

今年度の絵画コンクールは、これら「キラキラ」と「未来」を掛け合わせ、「行ってみたい場所」、「なりたい職業」などの夢や、「大切な宝物」、「心に残る思い出」などの大切にしていきたいもの･･･全国の園児・児童・生徒が心に思い描く「キラキラした未来」を自由に表現してもらいたいとの思いからこのテーマに決定しました。

応募期間は
2025年8月25日(月)～9月5日(金)17時まで！
附属に通う子どもたちから多くのご応募をお待ちしています！

詳細はこちら⇒

主管校　北海道教育大学附属函館小学校　附属特別支援学校

第19回 小学生『夢をかなえる』作文コンクール

本コンクールは、小学校でのキャリア教育の実践や、児童の学習意欲向上を目的として、非特定営利活動法人（ＮＰＯ法人）日本ＦＰ協会が主催する作文コンクールです。これまで全国の国立大学附属学校から、数多くの個人賞や最優秀学校賞が選出されています。是非、小学生の皆様からのご応募をお待ちしています。

なお、本コンクールより全附P連は後援団体となり、周知に協力しています。

詳細はこちら⇒

幼稚園特別支援特集

全附Ｐ連幼稚園特別支援委員会

「遊び」を通じて、共に学び、理解し合う環境が、個性を育む

令和６年度の幼稚園特別支援委員会では、これまで取り組んできた視察事業を強化しテーマを設け、全国の附属学校園や、関連機関などへの視察や聞き取り調査に取り組みました。

視察先は、茨城大学教育学部附属幼稚園や、QUONチョコレートの豊橋本店、ドゥミセック豊橋店、パウダーラボ、ＳＤＧｓラボの関連諸施設、筑波大学附属久里浜特別支援学校、国立特別支援教育総合研究所、宮城教育大学附属四校園、東京都大田区産業プラザで開催された「こども環境サミット２０２５／共有空間ＥＸＰＯ２０２５」などが挙げられます。

背景

少子社会において義務教育段階の全児童生徒数が減少傾向にある中、特別支援学校等の児童生徒数は増加傾向にあります。これには大きく２つの理由があるとされ、ひとつは発達障がいについて社会の認知度が高まり、診断される子どもが増加したことがあり、ひとつは保護者が子どもの状況に応じた特別な配慮を求め、特別支援学校等を選択するようになったことがあります。しかし、最も重要とされる幼児期の行動観察は、保護者や関係者にとって、特に判断が難しく、実践に基づいた正しい情報の共有が求められています。

また、附属学校は、同大学附属校園間の連携が他の学校園より比較的図りやすく、校種を越えた交流を促進しやすい教育環境は魅力のひとつといえます。附属幼稚園では、義務教育および高等教育の基礎となる質の高い幼児教育の実践がなされており、また、附属特別支援学校では、障がいに応じた専門性の高い特別支援教育の実践がなされています。

目的

公教育を担う附属学校園から多様性を包括する共生社会を実現するため、附属幼稚園や特別支援学校などの学校園、また、関連機関から幼児期の子どもたちの障がい理解教育に連なる、学校園やＰＴＡの障がいの理解向上を図る取組みについて情報を収集し、附属学校の地域社会における公共性や公益性の向上を図ることを目的に実施しました。

内容

幼児期の障がい理解教育の基盤となる保護者の障がいへの理解促進を図るため、現地視察、聞き取り調査を行い情報を収集しました。

収集した情報は、幼稚園特別支援保護者交流会などで共有し、また、附属学校における子どもたちの障がい理解教育を推進する新たな単位ＰＴＡ活動を誘発する機会としました。

結論

幼児教育と特別支援教育の共通点であり、また、令和の日本型学校教育の片翼である子どもの可能性を引き出す「個別最適な学び」において、本事業の目的である幼児期の子どもの障がい理解教育を実現する子どもの個性を尊重した健やかな成長を見守る環境づくりが、遊びを通じてなされていることがわかりました。

子どもが、分け隔てなく、遊びを通じた学びにともに熱中する様子から子どもの個性を大人が理解し尊重し、子どもが安心して遊ぶことができる環境づくりの重要性を学びました。

年度を通じて取り組んだ、それらの学びや気づきを他の事業と関連づけ、附属学校園や保護者などの障がい理解の推進を図る試みは、実験的ながらも一定の成果があったように感じます。

また、視察などにより、附属学校に対する深い理解を得る機会を増やすことは、今後も推奨すべき取り組みであると感じました。

全附Ｐ連では、今後も戦略的広報活動の根幹となる情報収集に努め、全国の附属学校の魅力を社会に向け発信していきます。

本事業を通じて、全附Ｐ連の活動に深いご理解とご協力を示し、貴重な情報をご提供いただいた皆様方に心より感謝申し上げます。

全附Ｐ連ＰＴＡ活動助成を始めます

全附Ｐ連は、全国の附属幼稚園や特別支援学校のＰＴＡ活動、附属学校における障がい理解推進を図る全てのＰＴＡ活動を応援し助成します。詳しくは、全附連ホームページ「ＰＴＡ活動助成」をご覧ください。助成数に限りがありますので、早期のご応募をお待ちしています！

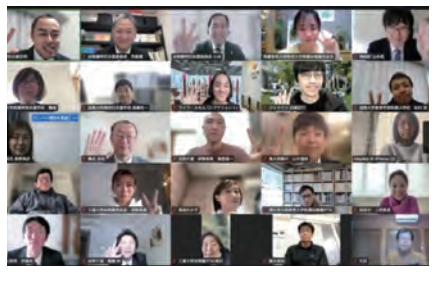
あいサポーター研修 募集

あいサポート運動は、障がいを理解し、ちょっとした手助けにより誰もが暮らしやすい社会を創っていく運動です。全附Ｐ連は、附属学校の子どもや保護者を対象とした「あいサポーター研修」の開催を推進します。

特別支援教育周知活動とは

全附Ｐ連では、附属特別支援学校・学級の生徒や卒業生が活躍する福祉事業所などで製作された作品を購入し、贈呈や販売を行っています。附属特別支援学校・学級の教育活動を社会に向けて周知しています。

幼稚園特別支援保護者交流会を開催



令和７年２月１日「附属学校を楽しもう！～子どもとともに遊ぶから学ぶ育ち方～」をテーマに、附属幼稚園や特別支援学校の保護者や先生の交流会をリモートで開催しました。

株式会社ジャクエツの田嶋宏行氏や、シブヤフォントのライラ・カセム氏、国立特別支援教育総合研究所の山本晃氏を講師にお招きし、様々な取組みをお聞きしました。障がいの有無に関わらない遊具の開発、アートを通じて、障がい者の活躍を目指すお話しは、「相互理解、インクルーシブ教育に取り組む附属学校園の方針と通じるところがありました。多くの保護者や先生と直接語り合える貴重な交流会となりました。

第16回　一般社団法人 全国国立大学附属学校ＰＴＡ連合会（全附Ｐ連）ＰＴＡ研修会　全国大会

テーマ　「重ね合う」過去の良いものを継承しつつ、これから求められるモノを積み重ねていこう。

スローガン　子どもたちとこの国の未来のために～認め合い、共に時代を切り拓こう～

基調講演講師

9月26日(金)

くすのき しげのり 氏
一人ひとりがみんなたいせつ
～作品に託す願い～

9月27日（土）

美馬 のゆり 氏
子どもたちとＡＩの時代を生きる
――　変化を楽しみ、未来を育てる力

分科会　9月26日(金)

中山 芳一 氏
子どもたちと共に非認知能力を育むために

桐淵　博 氏
子どもたちのいのちを守るために
～ASUKAモデルと体系的な救命教育の推進～

北村 弥生 氏
障がいのある児童生徒に有効な学校での防災準備

Meta社・総務省の連系企画　ＩＣＴリテラシーについて

日程　令和７年 ９月26日(金)、27日(土)
場所　リーガロイヤルホテル東京
対象　附属学校園の保護者および教職員
主催　一般社団法人全国国立大学附属学校PTA連合会

全国国立大学附属学校ＰＴＡ連合会（全附Ｐ連）が主催する「ＰＴＡ研修会 第16回全国大会」が、令和７年９月26日(金)・27日(土)の２日間にわたり、東京・リーガロイヤルホテル東京にて開催されます。

本大会では、保護者や教職員が一堂に会し、全国の附属学校園に共通する教育課題について学び合い、交流を深める貴重な機会を提供します。初日の基調講演には、数々の教科書にも作品が採用されている絵本作家・くすのきしげのり氏をお迎えし、「一人ひとりが みんなたいせつ」と題して心温まる講演をいただきます。

また、当日は４つのテーマに分かれた分科会を開催。「非認知能力の育成」「救命教育の推進」「障がい児への防災準備」「ＩＣＴリテラシー」など、今まさに求められている教育課題に迫る内容となっており、全国の皆様と知見を深め合える場となっています。

夜には、立食形式の情報交換会も行われ、地域や校種を超えての交流が可能です。翌日は、美馬のゆり氏（公立はこだて未来大学教授）による「子どもたちとＡＩの時代を生きる」と題した基調講演のほか、附属セミナーでは省庁説明やＰＴＡ活動事例の発表も予定されております。

多くの皆様と会場でお会いできることを、心より楽しみにしております。

第４回 国立大学附属学校全国同窓会

令和７年３月21日にリーガロイヤル東京にて、各方面で活躍される附属学校出身者および各都道府県の同窓会会長が集い「国立大学附属学校全国同窓会・第４回総会および大同窓会」が開催されました。

記念講演では、公益財団法人結核予防会理事長の尾身茂氏（東京教育大学附属駒場高等学校（現・筑波大学附属駒場高等学校）ご出身）がご登壇されました。尾身氏は、新型インフルエンザや新型コロナウイルス感染症を振り返りながら、次なる感染症に備えるために、これまでの経験を検証し、それを次世代へと継承していくことの重要性について語られました。

その後の懇親会では、国立大学附属学校の今後の発展につながるような、活発な意見交換が行われている様子が見受けられました。母校の後輩たちが学ぶ現在の教育環境にも関心を寄せてくださる多くの同窓生の存在に、各附属学校がこれからさらに発展していく力強さを感じました。

国立附属学校は、これからも日本の公教育の中核としての役割を果たしていくために、さまざまな課題を乗り越えていくことが求められています。今後とも、全国に広がる同窓生の輪をさらに広げ、深めていくことで、附属学校を取り巻く環境へのご支援を賜りたく存じます。全国の同窓生の皆様、そして各同窓会会長の皆様のご参加を、心よりお待ち申し上げております。

教育界と共に歩んで創刊79周年
日本最大の教育専門全国紙

日本教育新聞

全附Ｐ連 連載記念！

○全国国立大学附属学校PTA連合会の連載を毎月１回掲載（2025年５月19日付）

○国立大学附属学校応援キャンペーン
『日本教育新聞』の購読（新規１年以上）で令和６年『日本教育新聞縮刷版』をプレゼント！

教育というものを知ってもらうために　一般社団法人 全国国立大学附属学校PTA連合会 会長　宮本　昌尚

この国の未来を担う子どもたちの教育は今どうなっているのか、また教育の現場では何が起こっているのかを知ることは非常に重要であると感じています。それはわが子を見る保護者目線であるだけでなく、国の教育に対する政策や教育現場で奮闘する教員にスポットを当てた情報が子育てをするうえで必要不可欠であるからです。「教育は国家百年の大計」であることを保護者と学校が共有し、いじめ問題や教員不足といった教育界が直面する諸課題を一緒に考えていくことができることを祈念いたします。

お申し込み　◆教育現場の必須アイテム！国立大学附属学校園で求める教育情報が毎週届きます。是非ともこの機会にご購読ください。
【必要事項】学校名（ご担当者）、ご連絡先（郵便番号、住所、電話番号、FAX）、支払書類（見積書、納品書、請求書）、日本教育新聞の開始月、ご購読期間をお知らせください。
0120-43-3746／受付後、折り返しご連絡をさせていただきます。弊社ホームページの「お問い合わせ」→「お問い合わせ内容」からもお申し込みができます（要必要事項）。
※新規でご購読の国立大学附属学校が対象になります。個人のお客様は 24 時間ホームページからお申し込みができます（国立大学附属学校のキャンペーンとは別になります）。

日本教育新聞社 JAPAN EDUCATIONAL PRESS　〒108-8638 東京港区白金台3－2－10　■発行：毎週月曜日（月４回、年45回、合併月有）■ご購読料：月額2,500円（税込2,750円）、年額30,000円（税込33,000円）

全附後連は、全国の国立大学附属学校教育後援会のコンプライアンスと公共性の向上に努めます！

教育後援会　挨拶

全国国立大学附属学校教育後援会連絡協議会
理事長　**竹川 裕之 氏**

このたび、全国国立大学附属学校教育後援会連絡協議会（全附後連）の理事長を拝命いたしました。微力ながら、全国の附属学校と教育後援会のさらなる発展に尽力してまいります。

現在、国立大学は第４期中期目標・中期計画の４年目を迎え、附属学校にもこれまで以上に改革の波が及んでいます。全附後連は、こうした時代の要請に応え、全国の教育後援会がその公共性と信頼性を高め、子どもたちのより良い学びの環境を支えるための改革を、１つの教育後援会も余すところなく進めていかねばなりません

令和５年には『教育後援会運営ガイドライン』を発刊し、コンプライアンスの整備と改善に向けた指針を明確にいたしました。これに基づき、今後は「共に学び、共に考え、共に歩む」ことを基本姿勢として、全国の皆さまと共に〝教育後援会のコンプライアンスと公共性の向上〟に努めてまいります。

具体的には、『コンプライアンスの整備のためのStep3.0』を提唱し、制度と実践の両面から全国の後援会の在り方を見直し、より公共的で透明性の高い運営体制の確立を目指してまいります。

どうか引き続きのご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

各種QRコードのご案内

全附連 ホームページ

全附P連 パンフレット

全附P連 チャンネル

Instagram

X

Facebook

いじめ防止対策事業

セミナー動画の公開

P6にご寄稿の松浦先生が講師をしていただいた動画をはじめ、いじめ防止対策事業を行うためのセミナー動画を公開しています。いじめ防止対策プログラムを多くの学校で積極的に活用いただき、全国の附属学校からいじめをなくし、地域のモデルとなるよう、取り組んでいただくことを期待しています。

詳細はこちら⇒

附属学校・PTA活動情報 募集

「附属学校・PTA活動事例集」

全附Ｐ連では、全国の附属学校やそのＰＴＡ団体が取り組む活動情報を募集し、全附連ホームページやＳＮＳで公開しています。

活動事例：主催する行事や活動、ＩＣＴ教育、防災・防犯の取組み、働き方改革、ＳＤＧｓの取組み、部活動の改革、大学や地域、産学連携事業　など

提供方法：ＱＲコードを読み取り、活動情報をご提供ください。

編集委員

全附連盟

令和六年度情報広報委員会
木山 慶子（群馬大学共同教育学部附属特別支援学校）

令和七年度情報広報委員会委員長
関口 睦（埼玉大学教育学部附属中学校）

全附Ｐ連

令和六年度広報委員会
副会長　齋藤 伸（福島特支）
宮本 昌尚（香川坂出幼少中）
委員長　世古 丈人（三重中）
副委員長　長谷川 康介（北海道教育函館小）
堀 毅文（福岡教育福岡中）

令和七年度広報委員会
副会長　羌 叡應（神戸小）
世古 丈人（三重中）
委員長　村上 哲平（静岡浜松小）
副委員長　長谷川 康介（北海道教育函館小）
内田 麗奈（京都教育桃山小）

発　行　所

全附連｜全国国立大学附属学校連盟
（一社）全国国立大学附属PTA連合会
〒113-0033
東京都文京区本郷4-16-6
文京区本郷四丁目ビル
天翔オフィス後楽園9階905号室
TEL 03-5990-9444
FAX 03-5990-9445
E-mail jimukyoku@zenfuren.org
印刷　株式会社インテックス

全国国立大学附属学校園の幼児・児童・生徒の保護者の皆様へ

この保険は(一社)全国国立大学附属学校PTA連合会の団体保険です。

2025年度 中途加入受付中

カンガルー保険のご案内

ただ今募集中！

詳細につきましては、パンフレットをご覧ください。

団体総合生活保険
任意加入制度
24時間補償

約40％割引
全国国立大学附属学校PTA連合会が窓口の団体契約であり、保険料が割安です。
団体割引：30%　・損害率による割引：5%
・大口団体契約割引：10%　適用

24時間補償
お子様を取り巻く様々なリスクに対応した安心のための24時間補償です。

簡単・便利
保険料のお支払は「口座振替方式」更新のお手続き不要の「自動更新」です。

保険期間　2025年４月１日午後４時から2026年４月１日午後４時まで１年間
※1　随時ご加入いただけます。（お申込日にかかわらず、補償は2025年4月1日午後4時に終了します。）
※2　ご加入ご希望の方は取扱代理店までお問い合わせください。

加入対象者
①全国国立大学附属学校園に在籍の幼児・児童・生徒
②本制度にご加入いただいた上記①の兄弟で、公・私立の幼稚園・小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・中等教育学校・特別支援学校に通われている幼児・児童・生徒
（ご加入時に満3歳以上から満18歳以下の方に限ります。）

申込手続き　パンフレット差込の「カンガルー保険　お申込み方法」チラシ記載のQRコードもしくはURLよりインターネットでお申し込みください。
※パンフレットのご請求・ご加入のご相談につきましては、取扱代理店までお問い合わせください。

【引受保険会社】東京海上日動火災保険株式会社
（担当課）公務第二部文教公務室 〒102-8014 東京都千代田区三番町6－4　TEL:03－3515－4133　25TC-000381　2025年4月作成

全員加入制度　※個人での加入はできません。

1 園児・児童・生徒、教職員の皆さまのケガなどを補償する
園児・児童・生徒・教職員総合補償制度
（学校契約団体傷害保険、賠償責任保険PTA特約）

2 園児・児童・生徒、教職員の皆さまを犯罪事故からお守りする
犯罪被害事故見舞補償制度
（傷害総合保険）

3 PTA活動に参加中のご両親・教職員の皆さまのケガや賠償事故を補償する
PTA活動総合補償制度
（普通傷害保険PTA団体傷害特約、賠償責任保険PTA管理者特約、生産物特約）

保険期間　2025年6月1日午後4時から2026年6月1日午後4時まで
※「カンガルー保険（全員加入制度）」は全国国立大学附属学校PTA連合会を保険契約者、損害保険ジャパン株式会社を引受保険会社とし、学校契約団体傷害保険、傷害総合保険、PTA団体傷害保険、賠償責任保険（PTA特約、PTA管理者特約、生産物特約）をそれぞれ組み合わせた補償制度のペットネームです。
※この広告は概要を説明したものとなります。詳細はパンフレットをご覧くださるか、取扱代理店までお問い合わせください。

【引受保険会社】損害保険ジャパン株式会社
公務文教営業部文教室　〒160-8338 東京都新宿区西新宿1－26－1　TEL：050－3808－5536
SJ25-01419　2025年5月8日

カンガルー保険・取扱代理店のお問合せ先
この広告は団体総合生活保険の概要についてご紹介したものです。ご加入にあたっては、必ず「重要事項説明書」をよくお読みください。ご不明な点等がある場合には、取扱代理店までお問い合わせください。

《北海道・東北・関東・北信越・四国地区》
株式会社 第一成和事務所
東京都中央区日本橋馬喰町1-12-3 Daiwa日本橋馬喰町ビル3階
0120-100-492

《東海・近畿・中国・九州地区》
海上商事 株式会社
東京都渋谷区代々木2-11-15 新宿東京海上日動ビルディング
0120-745-748

第16回 附属OB訪問

新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的大流行）で、結核予防会理事長の尾身茂さんは政府の新型コロナ対策分科会の会長として「100年に一度」とされる感染症の危機に立ち向かってきました。ただ、その半生は順風満帆ではなかったそうです。自身も附属学校出身の尾身さんに子ども時代の話を中心に、今から世の中に出る子どもたちに伝えたいことを聞きました。

プロフィール

尾身 茂（おみ・しげる）
1949年、東京都生まれ。東京教育大学（現筑波大学）附属駒場高等学校出身。伊豆諸島や都内での地域医療などに携わった後、90年から世界保健機関（WHO）に勤務。アジア地域での感染症対策の陣頭指揮を執り、西太平洋地域でのポリオ撲滅や、新型肺炎（重症急性呼吸器症候群＝SARS）への対応に尽力した。新型コロナウイルスが流行した際には感染症対策専門会議の副座長や新型コロナウイルス感染症対策分科会の会長を務めた。

直前会長
桑名 良尚 ╳ 尾身 茂氏

失敗を恐れずに、好きなことに挑もう

桑名：尾身先生は、新型コロナ対策では分科会の会長として、科学的知見に基づく提言をパンデミック対応を指揮してきました。

尾身：なるべく医療が切迫しないように、一生懸命にやってきました。ただ、経済を回したいと考える人もいれば、もう感染しちゃっても良いんじゃないかという人もいて、様々な意見が社会にある中で、データを調べながら、考え抜く日々でした。

桑名：批判も多かったですが、分科会会長を辞めたいと思ったことはないのですか。

尾身：歴史の審判にも耐えられるような提言を出すことは、非常に難しい。だけれども、難しいからやらずに逃げるという考えはありませんでした。政府も一般市民も私たちに（提言を）求めている。感染症に携わってきた経験があるから、私たちがやらなくては、という気持ちでした。

◆得手に帆を上げ、自分を見つける

桑名：テレビなどで拝見する尾身先生は聡明（そうめい）な印象がありますが、子ども時代はやんちゃだったと聞きました。

尾身：とにかく、きかん坊でやんちゃな子どもだったようです。落ち着きがなく、じっとしていない。好き勝手をする。人の言うこともあまり聞かない。そんな私が変わったのは小学4年生の時でした。4歳年上の兄が東京教育大学附属駒場中に進学した頃で、私とは対照的でおとなしく、勉強もできる。そんな兄が、難関の中学に合格したことをきっかけにか、兄のように振る舞おうと思いました。勉強も真面目にやるようになり、学級委員に選ばれるまでになりました。

桑名：驚きました。

尾身：そこで、私が伝えたいのは、失敗してもいい。人それぞれに得意・不得意があるので、若い時は好きなことを一生懸命にやってほしい。親がやれと言うから、とかではなくて、肩の力を抜いてやりたいことをしてみる。そうすることで、若い頃から自分自身のことが理解できるようになるんです。そして、最後は自分が好きな方、得意な方を進路に選んだらいいのではないでしょうか。得手に帆をあげよ。私自身の人生を振り返ってもそう思います。

桑名：海外に行く人が少なかった時代に、高校生ながら単身で海外に行かれたと聞きました。大きな挑戦だったのではないでしょうか。

尾身：挑戦というより米国へのあこがれが大きかったです。今から思うと米国が輝いた最後の時代でした。高校3年の1年間、ニューヨーク州ポツダムの公立高校に通いました。高校を1年留年して米国に留学した訳です。日本の高校に通う子どもとは違う経験をした、この1年が私にとっては、私自身の基礎を作るものになりました。

桑名：どのような経験を米国でされたのですか。

尾身：当時はベトナム戦争のさなか。現地でお世話になった家族は、社会に対する関心も大きく、食卓では政治やベトナム戦争の話題が出る。私の実家の食卓では隣の家から米を借りたとか、噂話とか、そんな話題しか出なかったので、衝撃でした。私が社会や公共性へ関心を持つきっかけになりました。

桑名：そこから医者になられるまでには紆余曲折があったようですね。

尾身：米国留学をきっかけに外交官を志しました。であれば、東大法学部だと、帰国後に受験勉強をしていましたが、学生闘争の影響で、私が受験するはずだった年には入試がありませんでした。そこで、慶応大法学部に進みました。

桑名：文系の学生だったのですね。

尾身：もともと医者になろうとは思っていませんでした。ただ、当時は反権力が叫ばれる風潮があり、私も若かったので影響されたのでしょうね。外交官は権力側だから人民の敵といった感じ。悩んで毎日、本屋で立ち読みをしていました。そんな時に、精神科医の自叙伝を読み、『全く考えていなかった医師という仕事であれば、人民の敵と言われないのではないか』と感じ、自治医科大に移りました。

桑名：巡り合わせの連続だったのですね。

尾身：今こうやって、働いているときも悩んだ経験が生きていると思います。自治医科大に入った時には4回浪人したのと同じ年になっていましたが、人生は長いですから。今から思えば失敗することにも意味があったと思います。

◆不安を受け入れ、困難から逃げず、挑戦を続ける

桑名：この対談は、附属学校に通われているお子さんや、保護者の方がご覧になっています。何かメッセージはありますか。

尾身：一生懸命やったからといって、必ず物事が上手くいくとは限らない。けれども、一生懸命にしているところを他の人は見ていて、苦しみながらも続けていると応援も来るということです。私も、新型コロナの対応では、日々状況が変わる中で、提言を出し続けました。感染症対策は一人ではできなかったです。

桑名：大変な時期を乗り越えられました。

尾身：これも若い人に伝えたいのですが、困難があるのは当たり前だってこと。今の時代は困難だというけれど、これまでの歴史を見ても大変でなかった時代はないんです。生きていること自体が課題の連続なので。だからこそ、今の課題から逃げずに、本当の意味で向き合ってほしいと思うんです。

桑名：先生はこれまで、壁を越え続けてきたことで、コロナのような、誰も経験したことのないような壁をも乗り越えることができたのですね。それでも今の子どもたちも思い悩むことはあると思います。

尾身：人間というのは、不安は無くすことはできないんですね。だから不安は不安として受け入れてしまえと思うのです。代わりに今できることに集中すること。そうすることで、いつの間にか、不安がなくなっている。そんなことを伝えたいですね。

桑名：思い悩んだとき、一度しっかり向き合って、乗り越えられないかトライしてみる。越えられなくてもいい。そんな経験の繰り返しをすることで、壁を乗り越えられる力をつけられるのかもしれませんね。ありがとうございました。